

ピアノ指導に関する一考察

— F D 観点からの調査 —

兼 房 律 子

(大阪成蹊短期大学)

1. 研究目的

幼児の音や音楽に対する豊かな感性と表現力を援助するためには、保育者自身の感性・意欲・音楽的能力が求められる。本研究では学生のピアノ指導に対する意識を調査して、FD 観点から授業を検証する。ピアノ指導に関する研究は 2002 年度に続くが、本論は指導時の観点到焦点を当て、他の音楽授業との関連を含め、保育者としての意欲と資質向上に向けた音楽教育について考察し、保育者養成校教育の充実を図る一資料とするものである。

2. 方法

下記の通り、アンケートによる学生の意識調査を実施した。

調査日時：2003 年 12 月

調査対象：児童教育学科幼児教育学専攻学生

2 回生 88 名

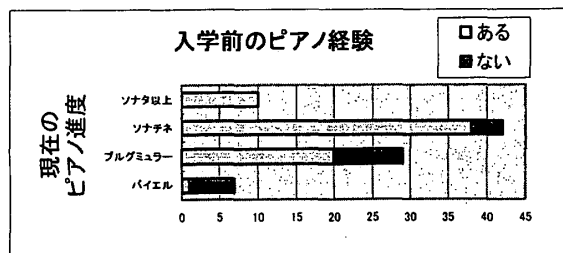
調査方法：選択肢方式及び記述式アンケート

調査内容：①履修状況 ②入学前のピアノ経験
③現在のピアノ進度 ④自身のピアノ能力に関する満足度 ⑤理想とする演奏能力 ⑥卒業後の進路 ⑦練習時間 ⑧意欲について ⑨受講と音楽嗜好への影響 ⑩授業への要望 ⑪音楽の精神的作用について 他

3. 結果・考察

本学では「器楽 1・2」において、2 年間にわたりピアノ個人レッスンを受講できる。ピアノに関する学生の意識は、経験年数・熟練度により、差異が見られる場合があると推察し、アンケート結果は、学生の進捗別に集計した。本誌においては紙面の関係から、以下の項目内容について述べる。

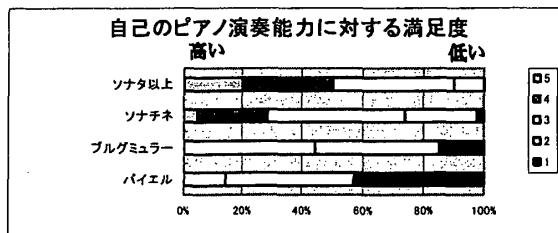
3.1 入学前のピアノ経験と現在のピアノ進度 (図 1)



入学後、初めてピアノを経験した学生は 19 名 (21.6%) であった。2 回生 12 月における該当者の進捗は、ソナチネ 4 名 (21%)、ブルグミュラー 9 名

(47.4%)、バイエル 6 名 (31.6%) である。

3.2 自己のピアノ能力に対する満足度 (図 2)



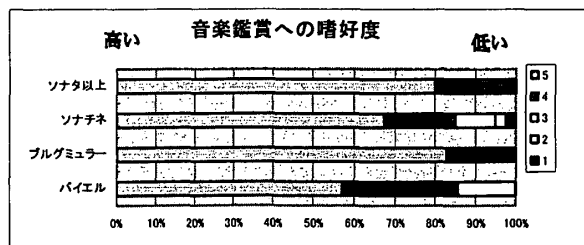
2 回生後期でまだバイエルの学生は、練習不足、またはかなり苦戦していると考えられる。図 2 に見られるように、その満足度は全員 3 以下であり、2 以下と答えた者は 85.7% に上る。理想としてのピアノ能力については、殆どの学生は初見・歌い弾きに支障がない能力、またはソナチネ・ソナタ程度と記載した。保育現場での適応という発想に起因すると考察する。

3.3. 練習時間 (表 1)

	日/週	分/週	分/1 日換算
バイエル	2.1	105	15
ブルグミュラー	2.3	151	21.6
ソナチネ	3	202.1	28.9
ソナタ	3.6	198	28.3

進度の遅い者は練習時間が少ない。意欲の減少および練習曲の演奏所要時間との関連が推察できる。演奏技術は練習の積み重ねにより、身につくという観点から考えると、練習時間差はピアノ上達度に大きな影響を及ぼす。指導を FD 観点から捉えて心理的サポートを継続し、学生の意欲を高めることが必要である。

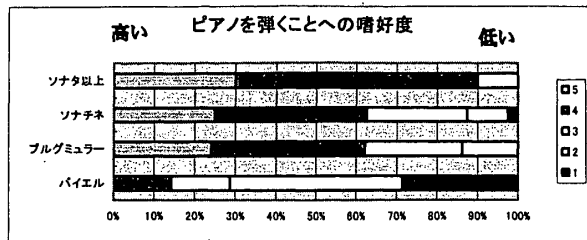
3.4 音楽鑑賞への嗜好度 (図 3)



音楽鑑賞への嗜好度については、72.7% の学生は 5 と答え 3 以上と答えた学生は 97.7% に上り、音楽の生活化が伺える。大学内で、演奏意欲に繋がるレディネ

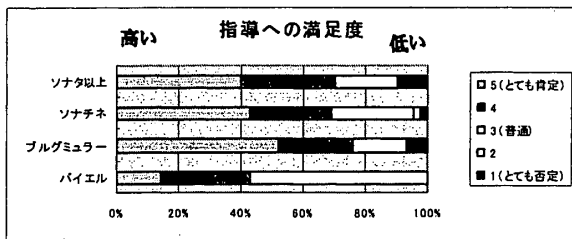
スとしての音楽環境の設定を視野に入れたい。

3.5 ピアノ嗜好度 (図4)



ピアノを弾くことに対しては図4の通り、84%の学生が3以上と答えた。進度の遅い学生の内、71.4%は2以下であり、理解度・意欲・練習時間不足を含め、精神的作用も影響すると考えられる。しかし同レベルでありながら、28.6%の学生はピアノを好み、練習をしている。学生の心理面への影響についての推察は後述する。

3.6 ピアノ指導への満足度 (図5)



指導への満足度は、図5の通りで、4以上は69.3%であり、満足度は高い。しかし、2以下と答えた者は5.7%であった。この内容は3.7に述べる。

3.7 授業に対する感想・要望

ほぼ全員の学生が、技術の上達、音楽性豊かな表現、色々な曲への関心など、能力向上への積極的な願望や、熱心な指導に対する喜びが記載された。しかし要望も数多くあった。同じ言葉・指導であっても、信頼関係と状況等により、温度差が生じる。ともすれば見落としがちな内面的思考にも注意を払い、受講生の率直な気持ち・心情として捉え、指導効果を高めるためのFD活動の一資料としたい。具体的な内容は当日揭示する。

3.8 学生の意欲高揚と減少

意欲は、褒められたとき・うまく弾けた時など、演奏技術・能力が身についた時に高揚する。また、嗜好と合致した曲、教材曲の歌い弾きにも高まる。保育者の資質養成とも絡め、教育現場を具体的に想定させることが大切であろう。友と演奏会を実施し、楽しく学んだとの記載もあった。自主的に楽しむ姿勢が育まれ、望ましい環境である。この他、指導者との信頼関係の厚さも大きく影響し、人間的環境の大切さが再認識される。

一方、意欲の減少・喪失については、努力してもうまく弾けない、難しい、練習不足、合格しない時など、演奏技術・能力面での記載が多い。読譜に時間がとられる、また理解できずに意欲を喪失するという記載は13名あった。これは楽典関係の授業と連携してフィードバックしていくことが必要であろう。この他、練習時間が確保できぬ、というものもあった。過密なカリキュラムの中で、十分な練習時間の確保が難しいのであろう。時間配分と工夫の自己管理が望まれる。ソナタ以上になると、手が小さく、和音が取れぬなど、身体的理由の悩みを持つ学生も存在し、各々の学生の状況・悩みを的確に捉えてアドバイスすることが必要である。

3.9 音楽の精神面への作用 (表2)

		バイエル	ブルグミュラー	ソナチネ	ソナタ以上
ピアノ演奏	心に变化	42.9%	31%	16.7%	150%
	人間的成長	14.3%	24.1%	26.2%	50%
音楽鑑賞	心に变化	28.6%	58.6%	64.3%	60%
	人間的成長	0%	24.1%	11.9%	40%

音楽の精神面への作用を自由記述させた。ピアノ演奏を通して心の変化を認める回答は、表2の通り多数にわたる。ピアノ演奏による人間的成長効果を認知している学生は、上達度に比例し、努力姿勢、集中力、自信などに繋がったと答えている。

音楽鑑賞による心の変化を認めた学生は、音楽への感情移入作用結果と考察され、多数にわたり、親しんでいることが明らかである。初級者に、音楽を人間的成長と重ねた学生の該当者はなく、音楽性を捉える聴取力、作品への感性・思考等の把握力、集中力等の影響が関わっていると推察される。

4. まとめ

音楽の上達には、豊かな心で音楽を感受できる姿勢が欠かせない。また学生のピアノ演奏への意欲は、指導者との信頼関係や彼らの心理状態による影響が大きい。指導においては、常に学生の心情を把握して励まし、確実に演奏技術を身につける喜びを得て意欲を高められるように配慮し、実践を通しての楽典理解や音楽鑑賞を通して音楽性を培いたい。また友との演奏交換などが音楽への憧れとなり、音楽嗜好への向上や意欲に繋がることにも注目し、大学内の音楽的環境の向上を図ることも視野に入れねばならない。

保育現場の想定による音楽表現は、保育者としての目標の再認識と資質の向上に繋がる。音楽への感動、時には自己との葛藤に向き合いながら音楽と関わる姿勢は人間的成長にも繋がる。養成校ではこれらを総合的に捉え、保育者資質の向上を図ることが大切である。